



のんびりVRMMO記 5

α L P α α L I G α T

まぐる猫@恢猫

Maguroneko@kaine



いいだみさ
ミィ(飯田美紗)

おさな なじみ
双子の幼馴染。13歳。
外見に反し、戦闘大好きの
ハードゲーマー。

このえ つくみ
ツグミ(九重鶯)

本編の主人公。25歳。
双子の妹達の親代わりで、
ゲーム世界では生産職に。

小桜&小麦

にゃんこ太刀に宿る
猫又のペット。
小桜(白)と小麦(黒)で
一心同体。

リグ

かわい くも
可愛らしい蜘蛛の
魔物。ツグミの
フードの中が定位置。

さかき るり
ルリ(神瑠璃)

双子の同級生。13歳。
薙刀が得意で、
ゲーム世界でも攻撃専門。

さかき し の
シノ(神信乃)

ルリの親戚で保護者役。22歳。
やる気を一切見せない
物ぐさ系男子。

このえ ひたき
ヒタキ(九重鶯)

双子の妹。13歳。
あまり感情を表に
出さないが、
実は悪戯っ子。

メイ

二足歩行の羊の魔物。
身の丈より大きな
ハンマーが武器。

このえ ひばり
ヒバリ(九重雲雀)

双子の姉。13歳。
活発な性格で、
幽霊以外は怖いものなし。

少し忙しいながらもいつも通りの朝。

中学校に行く双子の妹達、雲雀と鵜を玄関で見送ってから、俺——九重鵜はゆっくりと出かける用意を始めた。

電車に乗ってホームセンターへ行き、適当な大きさの布を購入するためだ。

次の日曜日に、俺達は近所の神社が主催するフリーマーケットに参加するんだが、その時、机に敷いて見栄えを良くするのに使おうと思う。

実を言うとあそこのフリーマーケット、俺も小学生や中学生の時に、何度か両親と参加したことがあるんだ。

妹達が生まれてからは、なにかとドタバタして不参加だったけれど。

で、経験者は語るという訳ではないが、こういった布は絶対役に立つからな。

ホームセンターでの用事を済ませた後、スーパーで特売品を買いあさったり、帰り道で知り合いと話したり、神社に寄ってフリーマーケットに参加する準備をアレコレしたりしていたら、あつという間に妹達が帰ってくる時間になった。

「たっだいま〜つぐ兄にいい。お腹なか空いたなあ」

「たっだいま、つぐ兄にい。部活の走り込み、疲れた」

妹達は手を洗ってから、元気良く扉を開けてリビングに入ってきた。

元気いっぱいの雲雀は俺のことを「つぐ兄にいい」と呼ぶ。そしてやや感情の薄い口調くちようの鵜うは、「つぐ兄にい」と語尾を伸ばさない。

陸上部という、俺なら体力的についていくのが無理であろう部活をやっている妹達は、本当によく食べる。

たくさん動いているからだと思うが、食べ盛りの男の子と変わらないんじゃないか？

俺は冷蔵庫から、可愛らしい箱に入ったシュークリームを取り出しつつ答えた。

「ああ、おかえり。夢結堂ゆめむすどうのシュークリーム買ってきたぞ」

「うわっ、オシャレテイなシュークリーム！」

「出かけた？ ……あ、つぐ兄ありがとう」

箱を見た雲雀おどろが驚きながら中を覗き込む。

鵜うは少し首を傾げていたけど、すぐに俺が今日何をしていたかを察したようで、微笑ほほえみ

ながら札を言った。

「どういたしまして」

ちなみに「夢結堂」というのは、最近、若い女性に人気のお菓子屋さんである。

俺は今日、それを実感させられた。

知り合いに評判を聞いて行っただけけど、男の俺がホイホイ店内に入ったら肩身がとてせまも狭かった。

まあ俺が勝手にそう思っただけかもしれないけど。

シュークリームで小腹を満たすと、各々がやらなきゃいけないことに手をつける。

俺だったら夕飯の仕上げ。妹達だったら宿題……だな。

夕飯の準備を終えて風呂掃除をしていると、リビングから雲雀の叫び声さけが聞こえてきた。慌あわてて戻ってきたら、ただの宿題が終わった歓声かんせいだった。

なんともまあ……紛まぎらわしいにもほどがある。

夕食を食べて風呂に入り、寝る準備もある程度してから、お待ちかねのゲーム時間タイム。
用意周到という言葉がぴったりに感じるほど、妹達の準備は速かった。

まあ2人が楽しみにしているだけでなく、俺自身も楽しみになってきているし、ゲームをやることに異存はないぞ。

雲雀だって毎回唸りながらも、宿題はしっかり終わらせてるからね。

「はい、ログイーン！」

鵜に手渡されたヘッドセットを被り、雲雀の元気な声を聞きながら、俺はVRMMO【REAL&MAKE】のログインボタンを押した。

いつも通り意識が沈む感覚に襲われ、抗うことなくそれに身を委ねる。

昔はログイン時に事故が起きて、社会問題にもなったらしい。でも現代ではVRMMOで事故が起こるなんてあり得ないのだそつだ。

技術の進歩はすごいよな。



ふっと、いつもの意識が浮き上がる感覚。

目を開けると温泉の街コウセイの噴水広場だった。

もう見慣れた光景である。

今日はゲーム内の筑波山に行くための前哨戦、みたいな予定だったよな。

このR&Mの世界は日本の地形に対応している。

一応ヒタキにゲーム内での地名も教えてもらってるんだが、現実での呼び方のほうが覚えやすいし分かりやすい。なのでついそちらを使ってしまうのは許してほしい。

話を戻すと、俺達は今、現実世界で言う茨城県の神栖市あたりにいる。

筑波山に向かうため、まずは霞ヶ浦——ゲーム名はミステイレイクの畔にある潮来を目指すことになった。

潮来——このゲームではチョウライという村に泊まっている、大型客船愛好家ギルドが製作した大型遊覧船が目的だ。

遊覧船は筑波山の近くにも停泊するので、これを利用しない手はないらしい。

遊覧目的なのか移動手段なのか、結構複雑な運航のようだな。心配しても仕方ないけど。金額は1人当たり2500Mと良心的で、ベットのリーグ達の分はなんと無料だった。

さて、ログインした俺がまずやらなきゃいけないのは、そのリーグ達を喚び出すこと。俺がウインドウを開いていると、ヒバリとヒタキがなにやら相談をしていた。

「んん、コウセイから2〜3時間歩けば、チョウライに着くかな。途中で敵が多かったら

もつとかかるけど」

「チョウライ、村というより集落。安全地帯あるかもしれない。けどギルドはないかも」
「だよねえ。ああでも、どこのギルドで報告しても完了するから、クエストはやつこ
うか」

「ん」

現実世界だったら、家から筑波山まで車で2時間なのにな。

そして、街や村にギルドがあるのは当たり前だと思っていたんだが、住人の数が少ない
場合はギルドもないみたいだ。ちょっとシビア。

「じゃあ、ギルドで討伐依頼を受けてから出発で大丈夫だな？」

さつそく飛びついてきたリグ達をあやしつ、俺は妹達に聞いた。

頷かれたので、噴水広場からギルドへ向かう。

これまで何度か使ったことのある街から街への馬車が、チョウライまで出ていけばよ
かったんだけど、集客の見込めない場所には行き来がないのだそう。

ゲームでも世知辛さがあふれてるな。まるで一昔前の日本みたいだ。

「よし、チョウライに向けて出発だー！」

買いたれた物はないか入念に確認し終わると、ヒバリが片手を突き上げて叫んだ。
呼応するように、リグ達も気合いの雄叫びを上げる。

「シユシユー！」

「めめめめ、め！」

「にゃんにゃん」

今日はいいい天気なので、コウセイの近くからでも筑波山が見えた。

運悪く雨で見えなかったとしても、とにかく北西方向に歩いていけばチョウライにたど
り着くはず。

それに舗装されていないとはいえ商人の使う街道もあるので、そうそう迷子になること
はなさそうだった。

向かってくる魔物は倒してお金となってもいいつつ、のんびりと景色を楽しむ。
途中、馬止めがある広めの土地を見つけたので、そこで休息を取って再び出発。

ゲームの設定上肉体の疲労がないので、適当に飲み食いしながら歩き続けても大丈夫なんだけど、気分的にやっぱり休息は取りたいよな。



魔物との戦闘を何度か繰り返し、歩くこと2時間と少し。村と表現するにはいささか小さなチョウライに到着した。奥にはひとときわ目を惹くものがデンツと存在している。大型客船愛好家ギルドの遊覧船が、湖に陣取っているのだ。

「うわあ、すっごいねえ」

ポカンと口を開けて感想を口にするヒバリと、全力で同意という風に何度も頷くヒタキ。俺やリグ達も呆然と突っ立っていたので、双子のことをからかったりはできない。

さすがにこんなに大きいとは思わなかった。ただずっとここにいっても仕方がないので、遊覧船を食い入るように見つめるヒバリとヒタキを促し、集落に入っていく。

魔物対策らしき太い柵に囲まれた集落は、ごくごく一般的なものに思えた。

木造の家屋が並び、家畜が放牧され……視界の端にちらつく船さえ無視すれば、どこにでもありそうな風景だ。

ギルドらしい建物はなかったが、集落の中央には、俺達も会ったことのある女神様——エミエールを模した石像が建っていた。

教会で見た美しい女神像には及ばないが、魔物除けの効果と、周囲を安全地帯にする効果はちゃんとあるらしい。

俺達は遊覧船に乗せてもらうため、ぶらぶらしながら大型客船愛好家ギルドのメンバーを探すことにした。

まあ遊覧船の近くに行けば会えるんだろうけど、集落の探索もしたいからゆつくりとね。



広い集落ではないのであつという間に探索も終わり、遊覧船へ向かうことに。船に近づくにつれ、徐々にプレイヤーの姿が見え始めた。

乗客っぽい人も少しばかりいた。

客の数が思ったより少なくて心配になってしまったけれど、ゲームならどうとでもなる

か……と思い直す。

遊覧船を視界に入れながら歩いていると、ギルドの人であろうチャラそうな外見の青年が話しかけてきた。

「ちわつす。お兄さん達は乗船したい系っすか？ 乗船したい系ならここで大丈夫っすよ。案内しますんで、俺の話ちよつと聞いて欲しいっす」

「え、ああ……」

「歩きながら説明するっす。こっちっすよ」

青年の言葉遣いに俺は呆けた表情を晒してしまっただが、すぐに調子を取り戻して頷いた。こういうタイプの人とあまり接した記憶がないから、どう対応をすればいいのか戸惑ってしまっただけ、普通に接すればいいいな。

そこで聞かされた諸注意は……。

船が動き出したら走り回らないこと。

景色を見るのはいいけど、船縁から身を乗り出さないこと。

人魚やセイレーンに遊ばうと誘われても、魔物なので受け容れないこと。

……などなど。

俺とヒタキが思わずヒバリのほうを見たのはご愛敬だ。

さて、3人分の金額を払った俺達はさっそく船に乗り込んだ。

遊覧船に相応しく展望デッキは広々としていて、視界を遮られることなく景色を堪能できた。

展望デッキから船内へ戻る扉も綺麗な彫刻で飾られていて、大型客船愛好家ギルドの船への愛を感じ取れること感じ取れること……。

船内に戻った俺とヒタキは、休憩スペースにある木製のベンチに腰掛けた。

ヒバリやリグ達は船に興味津々で、ギルドの人達に許可をもらってから、さらに探検しに行ったよ。

許可されて喜ぶヒバリ達を、ギルドの人は微笑ましそうに見ていた。

トラブルはないと信じてたい。

窓からの日差しが暖かく、しばらくベンチでのぼんとしていたら、不意にヒタキが自身の指を折り出した。

「朝の7時、お昼の12時、夕方の5時。3回行ったり来たり。忘れないようにしないと」

ああ、確かに。

ちよっと眉根を寄せて考え込むヒタキの頭に手を置きつつ、俺は同感だと頷く。

「そうだな。油断していると、そういうところが疎かになりそうだ」

「ん、行き当たりばったりも楽しい。けど約束してる。約束、守れなかったら悲しい」

双子達は同級生と、日本の地理でいう水戸方面にある王都で待ち合わせをしているのだ。今日はリアルの木曜日で、日曜までに王都に行けばいい。なので、ゲーム時間としてはかなり余裕があると思う。

けど寄り道をし過ぎたり迷子になったりしたら、間に合わないかもしれない。気をつけないと変な場所に変なドジをしそうだから、俺。

そんなこんなでベンチで時間を潰していると、船が出航する時間になったのか、慌ただしい雰囲気になってきた。

俺とヒタキはギルドの人達の邪魔をしないよう展望デッキに向かい、出航するところを見ようと船の周囲を見渡す。

ちよっと探検から帰ってきたヒバリ達もいたので合流し、誰もいないデッキの特等席に

陣取らせてもらった。つまり、船の先端部分だな。

霞ヶ浦は湖なので、ベタベタする潮風ではなく心地よい風が流れてくる。

気候も穏やかだし、冒険するのに適してるよな。

最初はゆっくり進んでいた遊覧船も、徐々にスピードを増していく。

この湖の大きさなら、船旅は1〜2時間になりそうだ。

手すりを握り、サイドテールを思い切り風になびかせたヒバリが、楽しそうに表情を輝かせてヒタキに話しかける。

「ふあゝ、きつもちいいねえ〜！」

「ん、船に乗るのは久々。とてもいい気持ち」

「お父さんが休み取れるなら、今度の家族旅行は船でも良いかもね。じゃなくても水辺とか！」

サイドテールを押さえつつ、ヒタキは頬を紅色に染めて繰り返し首肯した。

リグは俺の頭の上に乗って真ん丸おめめをキラキラ輝かせているし、メイはピヨンピヨンと甲板を飛び跳ねている。

小桜と小麦は船のスピードに驚いたのか、尻尾を膨らませていた。

「む、順調ならログアウトまでにコウセイに戻れるはず。でも、運が悪いとダメかも。神様に祈っておいて」

ヒタキがまたも楽しそうな表情を一変させ眉をひそめたので、俺は彼女の頭に手を乗せてやる。

「遊んでるとマズいかもしれないけど、そこまで急ぐ旅でも……うおつ、あれは」

その時不意に、遠目にも存在感のハンパない、巨大な女神像が目に入った。あれが牛久大仏のゲーム版と言われている石像か。

話には聞いてたけど、実際に見るとその大きさは想像を超えている。俺の声に反応したヒバリも楽しそうに親指を突き出した。

「んん？ うわ、あれはさすがにすごいね！」

観光地になっていそうだなと思いつつ、俺は視線を巡らせて、船が水をかき分けて生じ

るキラキラした波を見つめた。

心が洗われるというか、とても穏やかな気持ちになるというか……このまま何事も起こらず、筑波山まで行けるといいな。

あ、見たことのない綺麗なヒレを持った魚が跳ねたぞ。

陽気な気候をのんびり堪能していると、筑波山であろう山の姿がどんどんくっきりとしてきた。

今さらだけどあれで良いんだよね？ 他に山っぽい山はないし。

「あ、見えてきた見えてきたー！」

整備された船着き場が見えると、遊覧船のスピードがゆっくりになって、乗客が荷物の確認など下船準備を始めた。

船を降りる際には、出航は時間厳守、時間になったら待たずに出てしまふ、この船の推進力は大型の魔石を使っている……といったことを教えてもらった。

ちゃんとお礼を言うてから、ギルドの人達に別れを告げる。

登るペースにもよるけど山で一泊するだろうから、彼らと次に会うのは明日だな。



俺達は船着き場から離れ、あまり整備されていない街道を歩き出した。

ここにも馬車の通った轍が強めに残っている、山を見て進めば大丈夫だ。

雑草が生い茂っているが、ヒタキ先生のスキル【気配探知】にかかれたいした障害でもなかった。

どうしても避けられない魔物だけ倒しながら、ついに山の麓にたどり着く。

幼馴染の飯田美紗ちゃん——ミイがいると魔物と戦いたがるから、少し波乱があったに違いない。けれど俺は基本慎重派なので、どうしてもそれらを避けてしまう。

まあ安全が一番。

日差しを避るため両目の上に手をかざしゆっくり見上げると、山は予想より大きくなかった。

「そこまで高い山じゃないんだな」

「ん、初心者向けらしい。でも現実と違って魔物がいるから、気をつけて登ろう」

「現実の筑波山って、ガマの油売りが有名だよ。だから分かるんだけど、カエルの魔

物が多いみたい。私、カエルは平気なんだ」ゲロゲロ」

ヒタキは俺の言葉に小さく頷き、ヒバリはなぜか小ネタを話し出す。確かにガマの油売りの口上は聞いたことがあるな。小さいころに。

そんなこんなで、俺達はなだらかな斜面を歩き始めた。

少し雲が出ているけどほぼ快晴と言って良い、快適な登山日和だった。

加えて、ヒタキのスキルがあれば魔物に気をつけなくても良い。

とても恵まれていると思えたが、やはり全てが順調にはいかなかった。

どうやらさつき話に出たカエルの魔物のなかには、探知スキルに引っかからない個体があったらしい。

「むきー！」

突然ヒバリが大きな叫び声を上げた。

岩場の陰から粘液塗れの大きなカエルが飛び出してきて、ヒバリの顔をペロンと舐め、逃げていったのだ。

【気配探知】が効かなかったからか、ヒタキもしょんぼりしている。

登り出してまだ数分しか経っていない。もしかしたらこの山には、探知できない魔物が数多くいるのかも……。

怒ったり落ち込んだりしていたヒバリとヒタキだったが、一念発起したかのように拳を握り締めて語り合う。

「うぎぎ……この屈辱は倒して晴らすべし！」

「ん、べしべし！」

元気になるのは良いけれど、気合いを入れすぎて怪我をしないよう、気をつけて欲しいところだ。

さて、まだまだ目的地は遠いので、気を取り直して登って行こうと思う。

R & Mを始めたばかりのころに俺がもらった割り札。それを何かと交換してくれる店は山の中腹にあるらしい。

攻略掲示板には山頂と書いてあったと数日前に聞いたけど、どうやら間違った情報だったようだ。

ある程度は道が出来ていても、最後まで楽に歩ける訳ではない。

どうしても迂回しないといけない場所もあり、小さな山ながら苦戦しそうな予感があった。

やる気と言うより「殺る気」に満ちあふれている双子を先頭に、俺達は進む。

ちなみにリグは俺の頭に乗っているから問題ない。

小桜と小麦は、3センチの道幅があればどんな悪路でも進めるスキル【キャットウォーク】があるので、スイスイ歩いていた。

メイはと言うと、身長やら歩幅の関係で危ないから、俺が片腕で抱き上げているよ。

最初ががんばって歩いていただけ、見ているこちらがハラハラするので、最終的にこの態勢で落ち着いた。メイ自身も嫌ではない様子。

最初こそなだらかだったとはいえ、デコボコした場所、大きな岩がゴロゴロ転がっている場所、木や草が生い茂っている場所、カエルの魔物が大量発生している水溜まりなどがあるからな。

「マジ!? ぜ、全然進んでくれない!?」

たいした距離も歩いていないのに、ぬらりとした粘液を全身にまとった、紫色の毒々し

(・w・)

いカエルがまたまた現れる。

そして瘤うぶのように大きく肥大化ひだいかした舌先を、ヒバリの持つ盾に叩きつけた。

ヒバリはそれを苦くもなく簡単に弾はじき、お返しとばかりに舌を半なかばから斬り飛ばす。

「シユ！ シュシユ〜！」

斬り飛ばされた舌がこちらへ飛んできたので、リグが糸を出してキャッチ。それを受け取った俺はインペントリに入れた。

んで、リグの頭を撫なでる。

「お、ありがとうリグ」

【コドクガエルの舌（一部）】

「コドクは「孤独」ではなく「蠱毒」。カエル自体に毒はないので、珍味とついでに楽な遊びでござる。とある地方では日常的に食べるらしい。」

「ん、最後。消し炭待ったなし。【ファイヤ】」

ヒタキが片手を上げてスキルを詠唱する。

するとヒバリは盾でカエルの顔を思い切り殴りつけ、素早く距離を取った。

次の瞬間、コドクガエルはヒタキの魔法スキルで大炎上。HPゲージが削り切れると光の粒つぶとなって消えていく。

見た目的に毒を持っていそうな魔物だったので、危険を避けるべく、小桜と小麦は俺の隣で見学していた。

だけど毒はなかったみたいだし、次からは参戦しても良さそうだな。

カエル一匹に過剰戦力かじょうだと言われるかもだけど、死んだら目も当てられないから、最初から全力投球でいこう。

ヒタキが【気配探知】を発動させ、周りに魔物がいないことを慎重に確認してから歩き出した。

一戦を終え、かいてもいない汗を拭う仕事をしながらヒバリが口を開く。

「ちよっと魔物の数が多いね。さっさと登って、お店かその近くで一泊するのが良いかもしれないなあ」

「ん、安全に早く登るのは大事だから、そんな感じで。中腹まではそこまで危ない魔物い

ないし、きつと大丈夫。山頂付近はワイバーン出るみたいだけど」

ヒタキは太もものナイフホルダーに短剣をしまいつつ、眉根を寄せた。

俺達が目指しているのは中腹だし大丈夫か。

そのワイバーンってドラゴンだろ？

そんなのに出会ったら脇目も振らず逃げるしかない。なのでさっさと足を動かそう。



何度も魔物と戦って、良さそうな場所を見つけては小休止を取り、ひたすら山を登っていくこと数時間。

日も傾いたところ、ようやく目的地である木札交換屋が見つかった。

比較的小さめの山だと、俺達は舐めてしまっていた。魔物がいるだけでこんなに時間がかかるなんてな。

外観は日本の避暑地で見かけるログハウスとなんら変わりなく、『木札交換します』という看板がなかったら、個人の住宅と見誤りそうだ。

こんな魔物の出る山の中腹に自宅を建てる一般人なんていないだろうけど。

窓から中を覗こうとヒバリはビヨンビヨン飛び跳ねていたが、無理だったらしい。ムツと頬を膨らませ、扉を思い切り叩き声を張り上げた。

「こゝんゝにゝちゝはゝっ！」

ヒバリが言い終えると同時に、少々震えた声で入室を促す返事が聞こえた。

これは多分、笑いを堪えてる感じかな。

男性とも女性とも取れる、中性的で不思議な声音だった。

店内に入ると、壁一面が取っ手の付いた引き出しのある棚だらけになっていた。

俺達は圧倒され、それをぽかんと眺めてしまう。

そこに声の主がやって来た。

『ようこそ、お客人。半分の割り札をお持ちかな？』

柔らかな水色の長髪、海のごとく鮮やかな青色の瞳。

ゆったりしたローブを着ているのでバツと見では分からなかったが、椅子から立ち上がると男性だと判明した。

目測で身長が180センチを超えていて俺より大きい。

頭上に目をやってアイコンを確認すると、NPCを示す緑色だった。

「え？ あ、はい。持っています」

青年の言葉に動揺しつつも、俺はインベントリから割り札を取り出した。割り札を受け取って少し考える素振りを見た青年は、淀みない足取りでひとつの棚の前に立つ。

そして引き出しを開け、同じく半分に分れた木札を手にした。

『うん、これが片割れだね。とても面白い場所に入ることができる通行証で、なかなか発行されないから入手ににくいんだよ……はい』

左右の手に持った札を合わせると、元からそうだったようにピッタリと1枚になった。

「世界樹の通行証」

世界に根を張る世界樹の木片で作られた通行証。世界樹の上にある「聖域」と呼ばれる都市に入ることができる。売買譲渡不可。



説明を読んだ俺が目を見張って青年に顔を向けると、とても楽しそうな表情をしている。なんとなくだが、この青年はただならぬ存在なのではないだろうか。相変わらず楽しそうにクスクス笑っている彼に、俺はこの近くでキャンプしても良いかと尋ねる。

すると青年は何かを呟いた。

同時に、壁一面にあった引き出し棚が一瞬で姿を消してしまう。

棚が全て取り払われると本当に殺風景な部屋になった。

『ここに泊まるという。オレは必要な時以外、留守にしているからね。朝になったら自由に出ていって大丈夫。ただしこんな場所だから、防犯なんてあつてないようなものだよ』
「はあ……」

唐突な話に思わず俺は気の抜けた返事をしてしまった。しかし部屋を提供してくれるのはとてもありがたいので、お礼を言ってお礼を下げる。

「あ、ありがとうございます……ん？」

顔を上げると、すでに青年は消えていた。

「ふあつ、消えたよ!? ドロロンじゃん!」

「……魔法陣? 彼は空間転移の魔法使い?」

ヒバリが驚いたように叫び、ヒタキは冷静に分析する。

と、とりあえず、今日は屋根のある部屋で寝られることをありがたく思おう。

ログハウス風の建物はしっかりとした造りをしているものの、什器は消えて何も残っていない。

でも最初は屋外で寝ることも考えていたから、色々と用意はしてあった。

俺はインベントリから厚手の布と毛布を何枚も取り出すと、布を床に重ねて敷き、毛布を被せた。

これで簡易ベッドの完成……だと思う。

欲を言えば、デコボコしている地面よりは良いんだけど、やっぱり硬い。

メイの実家でもらった羊毛は量が足りないの、今度どこかで探さなくては……。

あ、メイの毛を刈^かったりはしないよ、可哀想^{かわいそう}だし。
最悪、端切^{はぎ}れの布を詰めて布団にしておもう。

外が薄暗くなってきたので、ヒバリに光魔法【ライト】を使ってもらい、俺達は一息ついた。

「はふう、今日はもう休もうか？」

毛布にくるまりながらメイを抱きしめ、ヒバリが問いかけてきた。

とても魅力的^{みりょく}な提案なんだけど、その前に。

ここは安全ではないのだから、やっぱり見張り番とか用意しなくちゃいけないよな？
まあ俺がやっても良いんだけど。

そんなことを思いつつヒタキを見やると、彼女は親指を立てて、グッジョブポーズをしていた。

意味が分からず俺は首を捻^{ひね}る。

「この建物の周囲、魔物は避けてるみたい。不思議生物^{ふしぎぶつ}の暮らす場所是不思議、そう決まってる。自然の摂理^{せつり}。だから、皆で一緒に寝よう」

一瞬呆けてしまったが、ヒタキの言いたいことは分かった。

俺自身も毛布を被^かって座る。

【気配探知】で探ったのなら確かだろうし、見張りがいらぬのは楽だ。根拠^{こんきょ}はないけど、なんとなく大丈夫な気がするし。

簡易ベッドのサイズは大きく、俺達3人とベット4匹が横になってもまだ余裕があった。
俺を真ん中にして横になったから、川というより小の字に近い形となり、皆で一斉に「おやすみなさい」。

俺達が寝ている間、リグ達ちゃんと休んでいるのは分かるんだけど、不意に起きてしまった時とかはどうするんだろう？ また寝るんだろうか？

あとでこっそり聞いてみるのも良いかもしれないな。



「……朝になったな」

久々ではないけれど、一瞬で朝になる不思議な感覚に俺はほんやりとしていた。

ログイン時の感覚には慣れた気もするが、こちらにはまだ慣れない。
ふと、腹の上あたりに重みを感じた。

起き上がろうとするも、両腕が持ち上がらない。

どうにか動かした首を左右に振ってみると、俺の右腕をヒタキが、左腕をヒバリが抱きしめていた。

この分だとお腹の上にはメイがいるはずだ……とその前に、胸のところにリグまでいた。

小桜と小麦を探すと、頭の先で、2匹仲良く丸まって眠っている。

ここがバラダイスか。そんなことを考えてしまふ俺。

いやいや、それより早く双子を起こして出発の準備をしないと。

下山は登りより速く進めるかもしれないけど、安全第一は変わらないからね。

とりあえず腕を揺らしつつ声をかけると、ヒタキはすぐに目を覚ましてくれた。次に眠りの浅いリグ、小桜と小麦が順番に起きていく。

俺が上半身を持ち上げたら、メイは眠そうにしながらもどいてくれた。

最後まで起きなかったのはヒバリで、俺がしつとその鼻を摘む。

数秒後、ヒバリは「ふがつ」と言って飛び起きた。

これは現実でもゲームでも同じ反応だな。

「おはよう、ヒバリ。一番のお寝坊さんだな」

「お、お、お、おとおおはよう！」

ヒバリはドキドキしている様子で、胸を押さえながら言った。ところがすぐさま、嬉しそうにニヤニヤし始める。

毎回決まってこの表情なのだから、もしかしたら寝たふりなのかもな。小さい頃からの悪戯いたづらって言うか、まあそんな感じだ。

「そこまで動いてないし、満腹度まんぷくどや給水度きゅうすいどのメーターも大丈夫。あと、ツグ兄のインベントリに毛布けふしまえは行ける」

「ん、了解。さっさとしまつて山を下りようか！」

双子から腕わんこ子そばのように次々と手渡される布や毛布をインベントリに放り込み、最後に忘れ物がないかを確認する。

あの青年は「自由に出ていって大丈夫」と言っていたから、鍵かぎもかけなくていいんだよな……。

まだ日の出直後なので、今から下山すれば、よほどのことが起きない限りお昼の船便ふなびんに

間に合うだろう。

妹2人に視線を向けると、彼女達も準備が整ったようだ。

ログハウス風建物を後にした俺達は、ヒタキの【気配探知】に引つかからないコドクガエルの襲撃に注意しつつ、足早に進んだ。

行きはよいよい帰りはこわい、とならないよう気をつけなйт。

「んゝ、強い武器とかもらえたらよかったのにね。それに世界樹は遠いよゝ。北海道じゃん！」

「世界樹は北海道でも北寄りらしい。でも、行くのは楽しみ。美味しい物いっぱいあるよ、多分きつと」

「うぎぎ、それはそうなんだけどさゝ」

会話しながらも、ヒバリは盾を構え、ヒタキは周囲をしつかり警戒していた。

力を抜くところ抜くけれど、油断はしない。ちゃんと考えているらしい。

俺としては、妹の成長を見ることができて嬉しいような、もうしばらく手のかかる子供でいて欲しいような、複雑な気分になった。

まあそれは置いておき、俺も安全に下山することに集中しよう。

頭の上にはリグがいるし、メイも抱いてるし、万が一にも転んだら洒落にならん。

俺達はしばらく黙々と足を動かしだ。

「……んん？ あ、あれって」

俺はふと、ちょこちょこ動く小さな影を上空に見つけた。

目を凝らすと、かなりの高度で翼をはためかせる生き物がいる。

「うわっワイバーンだ！ 運が良いねっ！ ドラゴンはあんまり見れないって、掲示板に書いてあったんだ！ やった、皆に自慢できちゃうぞー！」

「ははっ、そうだな」

自分でも良く見つけたな、と思いながらヒバリの言葉に笑う。

それからカエルを倒しつつ歩き続け、お昼前によく霞ヶ浦——ミステイレイクまで戻ってこることができた。

来た時よりさらに乗船客は少ないが、大型客船愛好家ギルドの皆さんが気にしている様子はない。

今回の案内人は、例のチャラそうな人じゃなかった。

遊覧船に乗り、とくに何かするわけでもなくのんびりしていると、無事チョウライに到着。下船して改めて思ったが、この集落は大型船以外に特徴が何もない。

のどかとしか言いようがないので、目的を達成した俺達はさっさとコウセイへ戻ることにした。

「ふむ、たいした収穫がなかったかもなあ」

もしかしたら良い物がもらえるかもしれない、と期待して一心不乱に山を登ったけど、どうだったんだろうな。

そんな心の声がついあふれてしまった。

「ん？ いや、少しあった」

「……え？ ど、どんな収穫が？」

「世界樹の上、聖域に行ける。なかなか行けないから、他の人達に一目置かれる。圧倒的

優越感、ひたひた。ふんすふんす」

ヒタキは、こちらが思わず納得させられてしまうほどの、ドヤツとした表情である。

ついでに、親指を上げた両手を突き出しているので、適当ではなく本気で言っているのだろう。

まあそんな彼女の内心が分かるのは、俺達家族と美紗ちゃんくらいだと思っけど。

一方、なにが楽しいのか、ヒバリは少しばかり音程の外れた鼻歌を口ずさみながら、1人で先頭を歩いていく。

「ツグ兄いゝ？ ひいちゃん？ 行っちゃうよー！」

俺達が遅れていることに気づくと、ヒバリは手をメガホン代わりにして大きな声を出した。

1人で行くことなんて絶対にしないでくせに、とヒタキと笑い合って、俺は足早にヒバリを追った。



急がず焦らず、まったり温泉の街を目指す俺達。
俺はふと隣を歩くヒタキを見た。

すると視線に気づいたヒタキがこちらを向き、「どうしたの?」と小さく首を傾げる。

「たいしたことじゃないんだが、この後の予定は? やることは終わったけど、まだ時間はあるだろ?」

「ん、行き当たりばったりだけど考えてる。漁村として栄えてるとこ、行ってみたいかなって」

「うん、いいんじゃないか? 行きたい場所は、その時の気分が変わるものさ」

俺の唐突な質問にもきちんと答えてくれたヒタキ。

思わず俺は彼女の頭を一撫でする。

意外にも登山が順調で、ゲーム時間で2日はかかると思ってたのに、1日で帰ってこれた。まあコウセイに着くのは、お昼くらいになっちゃうんだけどな。

ヒタキが言った漁村は、現実世界で鹿島港が位置する場所にあつて、R & Mの港としては大きいほうらしい。

立ち読みサンプル はここまで

せっかく漁村に行くなら、俺としては新鮮な魚介類を探したいところだな。

ふと視線を前に向けると、ヒバリとメイがピョンピョン飛び跳ねていた。

なんだあれ?

なぜそうしているのかさっぱり分からないけど、とにかく可愛いな。

……うん、まあ放っておこう。家族という名の色眼鏡の影響かもしれないが、可愛いものは可愛いんだから仕方ないだろう?

そんなこんなでひたすら街道を行くと、やがて相変わらず木造建築群が見事なコウセイが見えてきた。

別に、火事になったら怖いとは思ってないよ。

街に入ると、まずはいつも通り噴水広場のベンチに座って作戦会議。

と言ってもほとんどヒバリとヒタキで話すので、俺の出る幕はないとか、俺が口を挟むことなんてあまりないんだけど。

「んん、このまま漁村行く?」

「ギルドは? 討伐報告しないと……って、王都のギルドで報告しても大丈夫だね。じゃあ行っちゃおうつか!」